

# 日本語における差別語の定義に関する一考察

趙 凌 梅

## 要 旨

日本語における差別語の研究は、1970年頃から大きな発展を遂げてきた。しかし、このような発展の中で、差別語とは何かという基本的な疑問について、未だに答えに曖昧さが残る。その理由は、一つの言葉が差別語かどうかはその言葉が使われる場面やコンテキストと大きく関わるため、客観的に捉えることが難しいということにある。そこで、本稿では、辞書と先行研究における差別語の定義を踏まえた上で、語彙としての差別語と文脈の中に存在する差別語という2つの面からプロトタイプの差別語を定義してみた。また、差別語論争の論点を考察し、論争する両側の意見のずれの本質は「差別語とは何か」への認識のずれにあるという結論を得た。

キーワード：差別語 / 定義 / 差別語論争 / 認知意味論 / プロトタイプ

## 1. はじめに

「我々は言葉を使って自分を表現し、言葉を使ってほかの人と意志を伝達しあい、そして、言葉を通して身の周りのできごとから過去の歴史までを理解し、さらに、言葉を習得することがすなわちその言葉が使われている社会の一員になることの証」(中村1995, p. 2)であるという。この考え方からすると、差別を表す言葉、すなわち差別語の考察はその差別語を用いている人々の中にある差別問題を理解するための入口であると見なすことができよう。

日本では、1970年代から差別語糾弾運動が盛んに行われてきた。その結果、差別語の言い換えが徹底され、マスコミも用語規制集などを数多く出してきた。しかし、このような糾弾と言い換えに関して、「行き過ぎ」だ、「差別語狩り」だという批判の声も少なくない(日本共産党中央委員会1975, 成沢1984など)。

差別語についての議論が起こるなか、共通した定義が見受けられない。抗議、糾弾をする側で「差別」を感じている言葉について、抗議される側は「差別」を意識しないで使った場合が多いようである。差別語問題について議論が進んでいる現在でも、差別を表す言葉、すなわち差別語とは何かということを答えるのはまだ難しいである。その理由として、「差別語」は、「リンゴ」や「机」のような語と異なり、人々の間に「共通の認識」が確立されていないことが考えられる。また、一つの語が差別語かどうかを判断する基準はあいまいであり、辞書を調べても判断できないことが多い。寿岳(1976)が指摘したとおり、「差別語とは何なのか、この命題は、深い歴史的社会的視野のもとに、しかも冷徹な言語科学的思考をともなって追及されねばならぬ」(p.60)のである。

そこで、本稿では、差別語とは何かという問いかけから出発し、まず辞書や先行研究による差別語の定義を概観し、さらに差別語とその言い換えに関してこれまで行われてきた研究と議論を通し

て差別語の特徴を改めて整理する。その上で、プロトタイプのアプローチを用いて差別語の定義を試みる。最後に、プロトタイプの差別語の特徴と差別語論争に見られる論点と合わせて差別語の問題とその定義の関係を考察する。

## 2. 辞書に見られる差別語の定義について

谷崎潤一郎（1934）の『文章讀本』には、次の一節がある。

われわれの國語の如く、いろいろの品詞に互った幾通りもの差別を設け、多種多様な云ひ方を工夫してあるものは、何處にもないであります。今日でさへそうでありますから、昔は一層それらの差別がやかましかった。(p.246)

ここで下線を引いた「差別」の使い方は、現在で言う「差別語」の中の「差別」とはずいぶん違っている。また、「差別語」という言葉について、多くの辞書では見出し語として説明されずに、「差別」という多義語の中で言及されることが多い。手近にある辞書、例えば新明解国語辞典（第七版）では、「差別」の意味と使い方は以下のように説明されている。

〔「差」は、ちがうの意。古くは、「しゃべつ」〕㊦比較される双方の間に客観的に認められる形状などの違い。「どれも同じ種類の果物だが大小の一が見られる／男女の一はあるが同じ人間だ」㊧問題となる事柄について、対立するどちらに属するかの判断が求められる、価値的な違い。「善と悪の一／愛国者と売国奴との一は微妙だ」㊨—する（他サ）〈なに・だれトなに・だれヲ—する〉対象を何らかの基準（観点）によって区分し、それぞれに異なった扱いをすること。「仕事の面で男女の一を無くする／年齢による一を設けて競技を行う／プロとアマの一無く参加を認める／無—級・無—爆発」㊩—する（他サ）〈だれヲ—する〉（社会的な偏見に基づいて）弱い立場にある（何らかの不利な条件を負っている）人に対して、不当に低い待遇を強いたり侮蔑的な扱いをしたりすること。障害者を—することは許されないことだ／人種による—語（2012, pp.586-587）

明らかに、「差別語」の中の「差別」はこの三番目の意味に当てはまる。他動詞としての「差別」は「だれヲ差別する」という形で使われ、「差別」の対象は人間であることが記されている。すなわち、「差別語」の「差別」は人間にしかできないことであり、また、その受け手も人間しかいない。差別語の言葉としての機能は、人間の複雑な言語意識と社会関係と大きく絡んでおり、文脈を考慮せずには差別語を定義することは難しい。

また、日本社会の「差別」と「差別語」観は、この数十年で大きく変わってきた。特に、1960年代以降、差別語とその言い換えに関する議論や研究は日進月歩に発展してきた。加藤（2010）は、1970年代を「差別語への意識向上期」、1980年代を「差別語問題エスカレート期」、1990年代を

「差別語問題転換期」と名づけている。このような変化の中で、差別語の定義、すなわち差別語とは何かということへの認識も変わりつつある。辞書での差別語の定義も時代的な特徴を示している。同じ辞書において、改版に伴い差別語の説明が行われるようになることが見られる。例えば、『日本国語大辞典』の初版（1974）では、「差別語」という見出し語はなかったのであるが、2001に出版された第二版では、差別語は「偏見や不当な先入観によって、あるものを他よりも低く扱ったり、蔑視したりするような語感を伴うことば」（p.124）という定義をされるようになった。さらに、『広辞苑』の第六版（2008）では、「差別語」は「特定の人を不当に低く扱ったり蔑視したりする意味合いを含む語」（p.1142）という定義をなされている。ほかに、デジタル大辞泉（2014）は差別語を「特定の人・団体・性などを不当に低く扱ったり、見下したりする意味を含む言葉。差別用語」という定義を提示している。このような変化は、言葉としての差別語が議論、研究され、ますます重要視されるようになったことを示している。

以上に述べた辞書の定義は、共通点として「差別語」ということばには蔑視・見下しの意味合いが含まれていることが強調されているが、どちらもまだ曖昧さが残る。例えば、「差別語」の指示する対象に関して、『広辞苑』では「特定の人」、『日本国語大辞典』では「あるもの」、デジタル大辞泉では「特定の人・団体・性など」と記されている。このように差別語が指示する対象は「特定の人」、「もの」、「団体」、「性」にもなり、揺れていることが分かる。また、一つの語が差別語かどうかは、その言葉の使われ方とも関連していることは辞書では言及されていない。

### 3. 論説に見られる差別語の定義

差別語は主に名詞であり、そして呼称に関するものが多い。塩見（1995）が述べたように、「近代以降の差別は、前近代の身分制とちがって、社会の関係性の作りだした差別である。つまり、文化の問題であり、言葉の問題であり、究極的には『呼称』の問題である」（p.214）。しかし、差別語の言葉としての役割は、呼称だけではなく、それ以外に蔑視、見下しなどのネガティブな意味合いも含まれている。このネガティブな意味合いを強調する差別語の定義が多く見られる。例えば、磯村・福岡（1984）では、差別語を「歴史的・社会的な過程の中で、現実社会に厳存する差別的な諸関係が一定のコトバにまといつくことによって、それ自体に特定の被差別者たちにたいするネガティブな情動的意味あいが固着せしめられたコトバのこと」（p.16）と定義している。また、小林（2011）は、差別語について「他者の人格を個人的にも集団的にも傷つけ、蔑み、社会的に排除し、侮辱・抹殺する暴力性をもつ言葉のことです。しかも、もっぱら自己選択できない自然的・社会的属性を差別の対象とされた人や集団を卑しめていう賤称語です」（p.16）と述べている。さらに、桜井（1996）は、意味論的分析を通して、「概念的意味」と「連想的意味」の違いから差別語の定義を説明している。

「意味」の中心をなすものは「概念的意味（conceptual meaning）」である。いうまでもなくこれはその語にとって論理的に必要な不可欠な意味であり、たとえば「少年」という語では「未成年

年の男性」がこれにあたる。

このほかに「連想的意味 (associative meaning)」と呼ばれるものがある。これは、一般にその語から連想されるイメージである。

[中略]

差別語を議論する際に、こうした意味の区別を明確にしておかなければならない。たとえば、「めくら」と言っても「目の不自由な人」と言っても実体は何も変わらないではないか、という主張がある。これは概念的意味については正しい。しかし問題とされているのは「連想的意味」である。「めくら」という語にはさげすんだ感じがつきまとうが、「目の不自由な人」にはそれがない。(pp.1056-1057)

このようなネガティブな意味合いを社会的イデオロギーと結びついて差別語を捉える研究も見られる。例えば、李・廣橋 (2010) では、「差別語とは、差別語はたんに他者との差異を強調する優越感の具体的な言語シンボルではなく、歴史的事実としての差別、社会的現実としての差別をシンボライズする言葉である。また、さらなる偏見を生み出し、差別を助長・再生産させる『資源』として利用されてきた言葉でもある。そのように差別語は、差別を維持し補強する社会的影響力をもっており、その実態のために当該の人たちが社会からスボイルされ、疎外され続けてきたという負の歴史を背負った言葉であるといえる」(p.110) と述べている。

その他に、渡辺 (1989) は、「逆差別」、「逆差別語」と対照して「差別」、「差別語」を定義している。すなわち、「特定の属性をもった人間をその属性をもっているというだけで不当に他より否定的に、または非好意的に処遇することを差別という。その裏返しに、特定の属性をもった人間をその属性をもっているという理由だけで不当に他より肯定的に、または好意的に処遇することを逆差別という。そしてこのような差別・逆差別を顕在化、助長、もしくは固定化するために使用される (または、役立っている) 語を差別語・逆差別語という」(p.67) のである。また、遠藤 (1993) では、差別語は「何らかの基準のもとに、それとの差違を見出して、ある人物を他の人物と区別して名づけ、それが名づけられた人物の人権を損なうことになる語句や表現」(p.110) であると解釈されており、被差別者の人権を損なうという差別語の特徴を提示している。

以上の先行研究による差別語の定義の共通点として、差別語には原義以外のネガティブな意味合いがあることと、そのネガティブな意味合いは差別される人や集団を傷つけやすいことが挙げられる。

しかし、実際の差別語論争では、上記の辞書や先行研究の定義では説明し切れない差別語の特徴も議論されている。例えば、杉尾・棚橋 (1990) では、差別語は本来存在しないという視点から、下記のように述べている。

1つのことばを「差別用語」と規定し、言葉が独自で差別をしたり、差別を拡大・助長すると考えるのは誤りである。言葉そのものが一人歩きして社会的な働きをすることはないのである。

その言葉を使用する人間が、ある意図をもって使用するものであるから、その言葉で表現された意図を問題にすべきである。(p.182)

このように、実際の差別語論争では、差別語自体が存在するかどうかも議論されている。辞書や先行研究における「差別語とは何か」という疑問への答えは、まだ十分とは言えない。争いの焦点になるような特徴こそ、差別語とは何かを見極めるために大切な条件だと思われる。

## 4. 差別語のプロトタイプ定義について

### 4. 1 プロトタイプ定義の有効性について

河上(1996)によると、プロトタイプ (prototype) とは、「カテゴリーの最も典型的な成員の持つ特徴の抽象的合成物もしくは集合体」(p.32) のことを言う。また、「カテゴリーの成員は、その成員らしさという点では一様ではなく、中にはプロトタイプに近いものもあれば、それとはかけ離れた周辺のものがあったり、成員間で段階性が見られる」(p.32) という。

以上述べたように、辞書や先行研究による差別語の定義は「差別語とは何か」という疑問への答えとしてまだ十分とは言えない。本稿では、「差別語」という語のカテゴリーを認知意味論のプロトタイプのアプローチを用いて定義することを提案する。その理由については、Lakoff (1993) を参照し、以下のようにまとめた。

まず、差別語という語のカテゴリーは、明確な境界がないため、定義する際は共通属性によって定義される。また、このカテゴリーに属する語は、家族的類似性を有する。

次に、差別語というカテゴリーの任意の成員は、他の成員よりもそのカテゴリーにおいて「より典型的な事例」であり得る。例えば、差別のために使われ、しかも使う人も受ける人も差別語として捉える語はより典型的な差別語と言えるだろう。

また、差別語として糾弾され、言い換えられる語でも、より納得されるものとそうでないものがある。すなわち、差別語と見られるカテゴリーの成員に段階があり、そして明確な境界がない。

以上、差別語は「家族的類似性」、「拡張可能な境界」や「中心的な成員と非中心的な成員」などの特徴を持っており、プロトタイプのカテゴリーとして定義することは適当だと考えられる。

### 4. 2 差別語論争から見る差別語の特徴

差別語の論争は、1970年代頃から始まり、1975年頃がピークになった。そして差別語の研究や論争は今日まで続いている。主に差別語を糾弾する側と「差別語狩り」を反対する側の意見が多いが、言語学などの観点から差別語を分析するものもある。差別語とは何かも、多種多様な意見の中でますます複雑に見えるが、これらの議論を通してプロトタイプの差別語の特徴を見いだすこともできる。本稿では、差別語論争の中で見えてきた意見を整理し、主に語彙としての差別語問題、および差別語と差別意識の関係という文脈の問題の二つの面から検討する。その上で、差別語になる語の特徴をプロトタイプのアプローチで分析する。

1) 「被差別者の人権を損なう」と「差別語狩り」、言論・表現の自由に関する論争

まず、差別語を使うことは、差別の思想を表し、被差別者の人権を損なうことになるというのが糾弾する側の意見である。例えば、山田（1974）では、「特殊部落」という語の使用について、「言葉をえらび、それをどう使うかは、その人の思想性によるものである。差別用語を無批判につかう文章は、その文章の全体に問題があることは明らかであろう」（p.30）と述べている。

また、部落解放同盟中央本部書記局（1975）は、「自由であるゆえに、その一字一句に対し、作家は、きびしい態度が要求される。いかに、表現が自由だからといって、再び軍国主義を復活させようという、反人民的意図の作品に対しては、世論をもって、ほうむり去らねばならない」（p.45）とし、さらに「差別助長の文学は、本来、人間の自由を求める、文学の行為そのものにも反しているからである。」（p.45）と主張している。すなわち、「表現の自由は人権の確立のためにこそ保証されねばならないことは、いうまでもない」（p.49）ということだ。

一方、このような差別語糾弾に対して、日本共産党中央委員会は無記名（1975）で以下のように「言葉狩り」を批判している。

「解同」朝田・松井派などによるこの種の一方的、主観主義的な「差別語」狩りが、日本語の表現の豊かさと正しさを傷つけるだけでなく、人びとの自由な言論を抑圧し、マスコミなどに自主規制という名の言論、表現の自由抑圧をもたらすことはあきらかである。これは民主主義の基本にもかかわってくる問題である。（p. 4）

なお、寿岳（1976）は、『「差別語」の言語学』という論考で、言葉の自由と差別語の関係をこのように説明している。すなわち、「言論の公的な自由とはいいたいことを何でもいえばよいですむものではない。人の自由を侵さぬ、すべての人間の基本的人権を尊重する立場と、権力に屈せ占められないことない自由な発言や表現とが完全に重なるときに、ほんとうの自由は存する。ある単語がある人の心の傷つける作用を本当に持っている時、それは控えるのが当然であろう」（p.55）ということだ。

そして、八木（1984）は、「差別語（差別表現）に対する糾弾が言論表現の自由を侵害するとは考えにくい」（p.78）とし、「近代的市民権利としての言論表現の自由は、その成立の当初からして差別を否定したものとしてあったのであり、したがって、結論的にいえば、差別する自由はそもそも言論表現の自由の枠内におさまるものではないと考えるべきではないのか」（p.78）と述べている。

さらに、このような「言論表現の自由は人権の自由以上でない」の意見に対して、成沢（1984）はまた以下のように反論を出している。

表現の自由は、性質上、他人を無視して無制限に主張されるものではなく、その意味で、「差別をする自由はない」という主張はなりたつ。しかし、それを口実に、恣意的に「差別」のレッテルを貼った不当な抑圧が横行している。これは思想の自由、表現の自由、ひろく基本的人権

の侵害であり、断じて許すわけにはいかない。出版人・報道人のなかには、「差別」の口実にした抑圧に対して、「自由を侵す検閲だと思ったが、こと人権の問題ですから」などと言うものがあるが、自由を侵害して（侵害されて）人権の尊重はないのである。（p. 6）

このように、差別語論争の中で、一番基礎となるものは恐らく「人権」の話題だろう。確かに、日本国憲法では、国民が一人一人差別されない権利も言論の自由も保障されている。この二つの基本的人権が矛盾になる点が、差別語の複雑性を反映している。そして、差別語が議論されている限り、この話題は無限に続ける可能性がある。したがって、差別語を定義する際に、何かを絶対にするのではなく、差別語になる言葉の典型的な条件を探すのが重要だと思われる。

プロトタイプの差別語はこのように、ある個人もしくは集団の人権を損なうことになる。というのは、ある言葉が使われることによって、ある社会的マイノリティーの人もしくは集団を見下し、その人もしくは集団を傷つけることになる。しかし、「差別語」と言われる言葉は、プロトタイプの程度が違うため、プロトタイプから離れているものを使うことによって、文脈などを考慮せずに糾弾され、批判されることは、使う側の「表現、言論の自由」を損なうこともあり得る。

## 2) 「言葉は問題なのか」に関する論争

部落解放同盟中央本部書記局 (1975) は、差別語 (特に部落差別語) の糾弾について、「基本的立場」をこのようにまとめている。

コトバは社会が生み出したものであり、差別語は差別社会が生み出し、維持しているものである。したがって、わが国の民主主義を問いなおしつつ差別社会の変革と人民の意識の変革を実現していくなかで、差別語は解消するだろう。

同時にコトバは、社会や、人民の意識に働きかけるという側面をもっている。したがって、差別語の告発・糾弾は、前進的成果をもたらし、社会変革と人民の意識変革をうながすし、またうながすように、糾弾闘争はすすめられなくてはならない。

…… (③以下略)。(p.49)

つまり、差別語は社会的な差別意識を反映するものであるため、差別語を糾弾することは社会における差別の意識を改革することにもなる。

一方、日本共産党中央委員会は以下のように「言葉狩り」と批判している。

社会に不当な状況や不当な差別が現存する場合に、その実態を放置したままでことば、表現だけをタブーにするのは、問題の真の解決にならないことはあきらかである。不当な差別を実態的にも、心理的にも克服、解決するという積極的立場から、ことばや表現の問題にも対処していくことが重要である。まして、「差別用語」や「差別的表現」でないものを「差別語」だと

こじつけてタブー視するのは、現存する不当な事態や差別を克服する問題を背景にしりぞけることにさえる。(無記名,1975,p. 6)

しかし、一方、このような差別語糾弾を反対する立場から、一つ一つの語が使われる場面や使う人の差別の意識の有無がよく強調される。例えば、鈴木(1975)は、『コトバ』は、とくに相手があって話す場合の『コトバ』は、前後の脈絡との関係で生命をもっているものであり、同じ『コトバ』でも、その文脈、その使い手の心のありよう、状況のありようによって判断されなければならない」(p.15)と述べている。さらに、三浦(1976)は、「語彙は、言語規範によって規定された、意義を持っている。この意義には、嘲笑や軽蔑を内容として持つことができるのであって、嘲笑や軽蔑に使われるのは『差別語』だといっても、すべての語が『差別語』かする可能性を持っているのであるから、使われかたで語の性格をきめてしまうとすべての語が批難されることになる」(p.63)と指摘しており、文脈を考慮せずに差別語の判断はできないと主張している。

このような語の捉え方は、國廣(1982)の「用法説」にあたる。すなわち、「語には一定の意味というものはないのであり、あるのはただ千変万化する具体的用法のみで、用法こそその語の意味であるという考え方」(p.12)である。しかし、國廣自身も、この用法説に無理があることを「われわれはいかなる場面的・文脈的な手掛りも与えられないで、ある一箇の語のみを聞いたり見たりした場合にもその意味を思い浮かべることができる。この状況は語が用法から完全に切り離された状態で与えられているのであるから、用法説では説明することができない」(p.21)と述べている。國廣のこの指摘をもとに、佐竹(2000)は「差別語は存在しない」という意見を反論している。

たとえば、「特殊部落」「業病」といった語を思い浮かべてみればいい。文脈なしで意味が理解できるはずであるし、その意味に差別性が含まれていることは否定できないはずである。差別的意味こそがこれらの語の意味の核心であり、その意味は表現者の意図や用法によってそのつど与えられるものではない。どのような文脈におかれようとも差別語は差別語なのである。(p.77)

すなわち、鈴木や三浦の観点と反して、佐竹によると、差別語は文脈に依存しなくても存在する。また、寿岳(1976)は、「言葉だけを問題にして封じ込めても差別はなくならぬ」とする点に「少々問題がある」と述べる。その理由として、「言葉を問題にすることも、差別をなくすることの一つの手がかりである。その言葉がなぜいけないのかを深く考えてゆけば、言葉以外の差別的世界に迫ることが出来る。だから、『言葉だけを問題にしても差別はなくなる』を、悪く発展させて、どうせなくなるのなら使えというのに万が一おちこんでしまえばこれはいけないことだ。場合によれば、まず言葉だけでも問題にしたらくさらにはまず言葉を問題にすることから、より深くその種の問題を考えることも出来る。……(中略)『言葉を問題にする』ことはすべてを問題にすることなのだ」(p.55)としている。



以上述べた通り、差別語論争の中で、問題となるのは言葉なのか、それとも差別の意識や文脈なのかということはよく議論される。プロトタイプの差別語は言葉としてもネガティブな意味合いを持っており、差別の意識や文脈も大事であることは言うまでもないが、この問題もプロトタイプの程度から説明すれば良いと思われる。すなわち、「差別語は差別のイデオロギーを反映し、文脈なしでも差別語は差別語だ」というような意見をする側は、語彙的によりプロトタイプの差別語に注目しているのに対して、「言葉は文脈が命であり、差別の意識がなければ差別語も存在しない」というような意見をする側は、言葉が使われる文脈をより重用視している。両側とも「差別語」を議論しているが、プロトタイプの差別から離れている程度から見れば、実は違う位置づけのものをしているかもしれない。

## 5. 結論

### 5. 1 プロトタイプの差別語の条件

本稿では、上記の辞書、先行研究の定義および差別語論争で現れた差別語の特徴を踏まえて、典型的な差別語の特徴を探り、差別語の語彙としての特徴と使用される文脈の二つの面から以下のようにプロトタイプの差別語の条件をまとめてみた。

1. 社会的マイノリティーに対して、使用する人を含めた社会的マジョリティーより劣っていると感じられ、蔑視・見下しの意味を表すネガティブな語感があり、被差別者の人権を損なうこと。
2. 使用する人には差別の意識があり、嘲笑や軽蔑のために使われること。

まず、語彙のレベルから見ると、桜井(1996)の指摘したように、「概念的意味」以外に、ネガティブな「連想的意味」もある。また、このネガティブな「連想的意味」は社会的マジョリティーによる差別のイデオロギーに基づくものであり、被差別者を傷つくことになる。また、差別語と差別のイデオロギーは裏と表の関係にあり、差別のイデオロギーがあるゆえに差別語があるのである。一方、ある言葉は差別語として認識されるのは、その言葉に差別のイデオロギーが反映されているからである。すなわち、プロトタイプの差別語は文脈に依存しなくても、語彙のレベルでネガティブな語感を帯びているのである。

次に、文脈から見ると、差別語はそれが使われる脈絡と相互作用して差別の役割を果たすのであり、使用する人に差別の意識の有無によって差別の色合いも変わるものである。したがって、一つの言葉が差別語かどうかを判断する時にそれが使われる文脈も考慮しなければならない。また、差別の意識に関して、悪意を持って差別語を使う場合はプロトタイプの差別語になるが、差別語を使う人は差別のイデオロギーに同化され、半ば無意識的にその言葉を使う場合が多く見られる。このような差別の意識はプロトタイプのものではないため、差別語の判断においても個人差が大きいと思われる。

## 5. 2 プロトタイプと差別語論争

差別語にはプロトタイプのものでないものがあり、個々の言葉はプロトタイプのもので離れている距離も違うのである。差別の意識や文脈は一つ一つの言葉が使われる場面から判断しなければならないが、語彙としての差別語はプロトタイプのもので離れる距離の相違で、違う特徴が見られる。すなわち、プロトタイプに近い差別語は、差別の社会的イデオロギーを反映し、言葉自身にネガティブな語感が強いのである。一方、プロトタイプに遠いものは、文脈への依存度が高く、差別のニュアンスの捉え方について個人差も大きいと考えられる。

前述の差別語論争の焦点も、このようにプロトタイプとの関係で説明できよう。「差別語を使用することは被差別者の人権を損なうことだ」や「どんな場面に使われても、差別語は不公平な社会構造を反映するものだ」というような論点は、プロトタイプに近いものを指していると思われる。一方、「差別語狩りは言論・表現の自由を無視する行為だ」や「差別語は文脈と差別の意思あつてのものだ」のような論点は、プロトタイプの差別語から離れているものを指すだろう。したがって、差別語の論争は、実は焦点がずれていると思われる。「差別語とは何か」という根本的なことに関する認識が異なるため、議論する対象になる「差別語」も実は同様なものではないかもしれない。

## 6. 終わりに

差別語とは何かということの認識は、社会的マジョリティーによって形成される社会規範(塩見, 1992)に裏付けられており、社会や文化の変化と共に常に変化している。本稿では、辞書と先行研究の定義を踏まえた上で、1970年代からの差別語議論の焦点と併せて、差別語のプロトタイプ定義の可能性を分析した。また、差別語を定義する際、言葉自身になるネガティブな意味合いだけではなく、それを使う人の意識や文脈も考慮しなければならないことを示した。さらに、差別語論争の論点を考察し、論争する両側の意見のずれの本質は「差別語とは何か」への認識のずれにあることを提示した。

プロトタイプの差別語の条件を検討することで、「差別語とは何か」という疑問を回答するための一つの参考を提供したのではないだろうか。差別語の抗議と議論を理解する時も、マスコミの言い換え集の中の言葉を吟味する時も、一人一人は違う観点を持っているはずだ。それは、その言葉がプロトタイプの差別語からどのくらい離れているのかということについて、人々がそれぞれ心の中で天秤にかけているとも言えよう。また、差別語は、時代の変化や社会の発展とともに変化する。そして、その背後にあるのは、人々の「差別」に対する意識の変化である。したがって、差別語とされる言葉は不変なものではなく、人権の改善などに伴う社会的意識の変化とともに変化するものである。プロトタイプのアプローチで差別語を定義することで、差別語の分析に一つの手がかりを提供したと考える。

本稿では、「差別語とは何か」がどのように捉えてきたのかを考察したが、具体的な差別語の検討には至らなかった。今後は、差別語問題として議論される事例を参考にし、日本語における差別語問題の本質をさらに探ってみたい。

## 参考文献

- Lakoff, George/ 池上嘉彦・河上誓作他訳. 1993. 『認知意味論 言語から見た人間の心』. 紀伊國屋書店.
- 磯村英一・福岡安則. 1984. 『マスコミと差別語問題』. 興英文化社.
- 遠藤織枝. 1993. 「差別語・不快語の流れと今」. 『國文學: 解釈と教材の研究』 38 (12). 學燈社. p110-115.
- 加藤夏希. 2010. 「差別語規制とメディアー『ちびくろサンボ』問題を中心に」. 『リテラシー史研究』 (3). リテラシー史研究会. p41-54.
- 河上誓作. 1996. 『認知言語学の基礎』. 研究社.
- 國廣哲彌. 1982. 『意味論の方法』. 大修館書店.
- 小林健治. 2011. 『差別語・不快語』. にんげん出版.
- 桜井隆. 1996. 「差別語と日本語教育ー『外国人のための基本語用例辞典 (第二版)』の改訂についてー」. 『言語学林1995-1996』. 三省堂. p1055-1064.
- 佐竹久仁子. 2000. 「『差別語』考」. 『ことば』 (21). 現代日本語研究会. p75-87.
- 塩見鮮一郎. 1992. 「差別語が変わることの意味」. 『部落解放』 (348). 解放出版社. p51-57.
- 塩見鮮一郎. 1995. 『差別語と近代差別の解明』. 明石書店.
- 寿岳章子. 1976. 「『差別語』の言語学」. 『上方芸能』 (1). 上方落語をきく会. p54-60.
- 杉尾敏明・棚橋三代. 1990. 『ちびくろサンボとピノキオー差別と表現・教育の自由ー』. 青木書店
- 鈴木均. 1975. 「差別語についてー放送用語いいかえ集の意味するもの」. 『思想の科学』 第6次 (45). 思想の科学社. pp15-24.
- 谷崎潤一郎. 1934. 『文章読本』. 中央公論社.
- 中村桃子. 1995. 『ことばとフェミニズム』. 勁草書房.
- 成沢栄寿. 1984. 「『差別用語』問題を考えるー歴史研究者の立場から」. 『部落』 36 (10). 部落問題研究所出版部. p 6-16.
- 部落解放同盟中央本部書記局. 1975. 「差別語問題についてのわれわれの見解」. 『部落解放』 (77). 解放出版社. p40-50.
- 三浦つとむ. 1976. 「『差別語』の理論的解明へ」. 『展望』 (206). 筑摩書房. p62-72.
- 無記名. 1975. 「いわゆる『差別用語』問題についてー「解明」朝田・松井派などの『差別語』狩りと言論・表現の自由擁護」. 『文化評論』 (170). 新日本出版社. p 2-6.
- 八木晃介. 1984. 「〈言論・表現〉の自由と差別語問題」. 『部落解放』 (218). 解放出版社. p72-80.
- 山田大介. 1974. 「差別用語の問題をめぐって」. 『部落』 26 (9). 部落問題研究所出版部. p. 24-31.
- 李相済・廣橋容子. 2010. 「差別語問題の諸相」. 『国際研究論叢: 大阪国際大学紀要』 23 (2). p107-118.
- 渡辺友左. 1989. 「敬語・差別語」. 『国文学解釈と鑑賞』 54 (7). 至文堂. p64-69.

## 辞書

- 広辞苑. 2008. 新村出編『広辞苑』第六版. 岩波書店.
- 新明解国語辞典. 2012. 山田忠雄他編『新明解国語大辞典』第七版. 三省堂.
- 日本国語大辞典. 1974. 小学館国語辞典編集部編『日本国語大辞典』第九卷. 小学館.
- 日本国語大辞典. 2001. 日本大辞典刊行会編『日本国語大辞典』第二版第九卷. 小学館.  
[on line]
- デジタル大辞泉. 2014. 小学館. ジャパンナレッジ (オンラインデータベース), 入手先 <<http://www.jkn21.com>>